

短冊石のナゾ

庭園文化研究分科会 建設部門 小村 徹

1. はじめに

当研究分科会のバイブルとなっている「小口基実、戸田芳樹 S50 **出雲流庭園**」によると、出雲流庭園の特徴の一つとして短冊石が打ってあることが挙げられている。短冊石自体は江戸中期以降に盛んに使われていたようであるが、出雲流庭園ではほぼ100%みられ、しかも多くの庭園の中央付近に据えられているとのことである。今回視察した江角氏庭園（斐川豪農屋敷）や康国寺庭園でも庭園の中央付近に堂々と据えられていた。しかし、私が短冊石を見た第一印象は不自然で滑稽に映り、庭園に馴染まない存在であるように感じた。そこで、今回は不自然と感じた短冊石について、起源や必要性などについて迫ってみる。



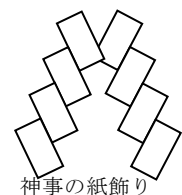
短冊石（斐川・江角氏庭園）

2. 短冊石とは

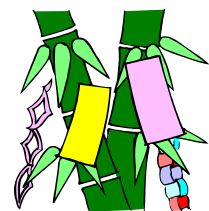
そもそも短冊石とはどのようなものなのか定義しなければならない。いくつかの書物等では短冊石を以下のとおり定義している。

- ・ 短冊形の切り石。庭の敷石などに用いる。（三省堂 Web 辞書）
- ・ 平たい長方形の石。日本庭園に玉石と混ぜて敷いたり、単独に短冊敷きとして用いられる。（建築情報.net）
- ・ 神社のシメの時に切って挟む場合の紙を短冊とよび、この短冊の形に石を打ってある場合をいう。御影の長方形の切石などを短冊石とは言わない。（小口、戸田 **出雲流庭園**）

一般的な辞書や建築関連のHPでは、細長の長方形の石すなわち七夕の願い事や俳句の時に使う短冊をイメージした石のことを言っている。一方、造園家である**出雲流庭園**の著者は、長方形の細長い石は切石とよび、この石を二つ以上ずらして並べて打った石の形を短冊石と呼んでいる。この両者は異なった定義がなされているが、出雲地方の庭では後者の使い方が一般的であるため、長方形の石を二つ並べた状態の石を短冊石と呼ぶことにする。



神事の紙飾り



3. 出雲流庭園における短冊石の役割

「**出雲流庭園**」では、「短冊石は機能的なことよりも、景致的（自然な味わい）な美しさをかもし出すために使われている」とされている。この技法は江戸中期頃から江戸の庭師から伝えられたとされる説が有力のようであるが、京都および山陽地方に多く残存しているとのことである。短冊石の役割は、造園家の意見では前述のとおり、自然な味わいを出すためとされており、加えて建物の横の線と平行に打つ場合が多いことから、横の広がりを感じさせるためのものとのことである。

4. 短冊石の必要性

先に述べた短冊石の役割は造園家もしくは庭師の意見だと考えられるが、私は短冊石が「自然な味わい」には到底感じられなかった。そのため、私なりに短冊石の必要性について検討してみるものとした。

まず、機能性については、自然石を用いた飛び石に比べると短冊石は平坦で画一的な形状であるため、歩行しやすいという利点があるため、機能性には優れるといえる。一方、景観上の観点からは、見る者の主観によるところが多いため、多様な解釈がなされようが、私は下記の可能性があるものと考えた。

◆ 自然を支配している証ではないか

自然の中に明らかな人工物を入れることにより、人間が自然を支配しているというメッセージと考えられないだろうか。

◆ 隠喩（言葉の上では、たとえの形式をとらない比喩、メタファー）ではないか

短冊を神事の紙飾りになぞり、神に守られた土地（家）であるなど何かの隠喩を込めたものではないだろうか。

◆ 僻心（ひがごころ）の表れではないか

素直さを失った大人心の表れを直接的に表現したものではないだろうか。少なくとも、子供に長方形の石を打たせたら、真っ直ぐ一直線に並べるであろう。

◆ 定格さを誇示するためのものではないか

如何に直角、平行、滑らかに整形できるかを見せつけるためではないだろうか。明治期以前は道具や動力の制約から直線の加工が高価かつ難しかったものと考えられるため、見栄の象徴として打ったのではないか。

◆ 行を表すためではないか

茶道や俳諧でも用いられる真行草（「真」は正格もしくは基本形、「草」はその変形した優雅な形、「行」はその中間）のうち、短冊は真、飛び石は草、合わせて行を表すためのものではないだろうか。

◆ 橋梁を表したものではないか

出雲流庭園に代表される枯山水には、池泉式と異なり橋が掛けられていない。そのため、橋の代用として短冊石を打ったのではないだろうか。

このように、私が考えるだけでも多様な解釈がでた。私は日本庭園の面白さの一つに、多様な解釈ができるところにあると思う。一人で考えるもよし、家族やグループで意見を交わすのもよし、想像に尽きないところがオモシロい。出雲流庭園で用いられている短冊石には、庭師や施主の思いがあったかもしれないが、むしろ後付けで解釈が広がるところに魅力を感じる。

5. おわりに

今の世の中には、定まったモノがあふれている。特に我々技術屋は科学的根拠を求められることから、数的、物理的に規定して物事を考える癖が付いている。反って、日本庭園はそのような数的、物理的な規定は何の意味もないことが多い。おそらく日本庭園（我々の住んでいる近傍では出雲流庭園）は技術屋の反対側に位置すると考えられるが、このような日本庭園に背を向けるのではなく、人間社会を考えるために、庭園に向向いてみるのも時間の無駄ではないと思う。